環境PRESS

水援隊便り
菊池川流域同盟　和水町水援隊長　平　晋一郎

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

「月と鼈（すっぽん）」という言葉があります。スッポンは首、尾、四肢を甲羅の中に引っ込めると甲羅は丸いので月と一緒にならべたものでしょうが、形は似ていても比較できないほど大きな差があるという例えです。しかしスッポンはめったに捕まらないし高級料理の食材として重宝がられます。

爬虫綱・亀目・スッポン科・スッポン属、淡水産のカメで県内では一般にスッポンと呼び他のイシガメ類をクズとよびます。普通のカメと違って甲羅の表面が角質化していないので体表は柔らかい皮膚に覆われ鱗板がありません。首は長く伸び、驚くと甲羅の中に引っ込んでしまいます。尾は極端に短く、手足には水かきがあり、おのおの3本の爪があります。体長は30センチに達するものもあります。

本州南部、四国、九州の河川や沼などに多く、浅い水底の泥に半分体を埋め、獲物が近くに近づいたら、素早く首を伸ばして獲物を捕まえます。魚、カエル、カニ、水底昆虫など主に肉食で、水草の実なども食べます。5～6月頃直径2センチくらいの丸い卵を30～60個ほど水辺近くの砂地を掘って産み付けます。最近は十町川や和仁川でもスッポンを見かけることが多くなりましたが、これは養殖したものが放流されたものではないでしょうか。天然ものと養殖ものが混在しているため、人為的に海外から持ち込まれたものとの区別が専門家でもなかなか区別が難しいようです。

本県では菊池川をはじめ各河川と支流に生息します。かつては球磨川はスッポンの多産地と言われていましたが、今では個体数がずいぶん減ったようです。子供の頃、梅雨時の増水時に鮒を釣っているとスッポンを釣り上げてどうしょうもなく、慌てて川に逃がしたものです。というのは、スッポンは噛み付いたら離さない、「雷が鳴るまで離さない」とか、歯が鋭から指を喰いちぎるとか聞かされていたので、怖いイメージを持っていました。

噛み付く力は強く、歯はナイフのように鋭いので、用心はしなければなりません。もともと憶病な動物で防御のために食つくのですが、無理に引き離そうとすると、首を甲羅の中に引っ込め、より強く噛むので、噛み付かれたら水に戻してやれば自分から離れて直ぐに逃げていくということです。

カメ類は爬虫綱であり、蛇の仲間であるためか人間には一般に忌み嫌われます。カメも首も長く出した顔形を見るとやはり気味悪い形相をしています。しかしどういう訳か、中国や日本では昔から食用として利用されていたようです。日本では縄文時代、弥生時代の貝塚からも食べた痕跡が発見されているし、中国ではスッポンを調理する専門の職人も居たようです。スッポン料理は日本では栄養価の高い高級料理として扱われています。料理する時、膀胱と胆のうを破らないようにして排出するとあとは全部食べられるといわれています。鍋物、油いため、雑炊、吸い物、何でもおいしい出し汁が出るため貴重な日本料理の材料とされています。またスッポンの血を焼酎やワインで割ったものを食前酒として出されることもあります。乾燥したものは健康食品としても利用されます。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡 10

大田幸博
（元・菊水町史編纂委員会副委員長）

先日、手塚直樹青山学院大学教授に会う機会がありました。大学時代の一年先輩で、中世城や輸入陶磁器に大層詳しいので、いろいろ話が聞けました。認識を新たにした事もありますので、今月は、その中から、志口永城跡に関係する小段群のお話をします。

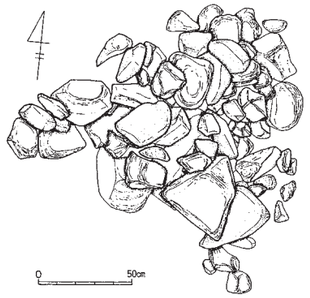
〔小段群〕

志口永城跡の斜面部に残る階段状地形です。原形は、間違いなく城跡の遺構と思われます。何故、この様な事を書くかと申しますと、これらは、外見上、段々畑（跡地）に見えるからです。駆け出しの頃は、説明に多くの方々が首を傾げられました。しかし、その後の発掘調査で遺構が検出されて、遺物の出土を見る事も多くなりました。さらに、標高の高い大規模山城からも、小段群が見つかりました。後世に農地として開墾される可能性のない山中からでした。筒ケ嶽城跡がそうで、本丸の標高は、501・4mです。荒尾市・玉名市・南関町を跨いでいます。こうして、遺構としての小段群が認識される様になったのです。

では、どの様な防禦効果があるのでしょうか。斜面部が急傾斜であれば、敵勢は当然、よじ登れません。しかし、これが、緩斜面であれば、簡単に突破してしまいます。対策としては、斜面の下位から上位に向けて小段を造設していきます。小規模であれば、短い工期で、数多く造れます。そうして、有事になれば、守備兵が上段に陣取って、下位からの敵勢を攻撃するのです。手塚教授は、つぶて（飛礫）を投げても、非常に効果があると申しました。飛び道具が大石や割り石ですから、容易に手に入ります。実際、球磨郡山江村の山田城跡からは、この類の石が、集石として出土しました。小段ではなく、二股尾根に挟まれた高所にある凹地からですが、参考になります。この山田城は、中世文書によれば、南北朝時代に実戦を経験しています。

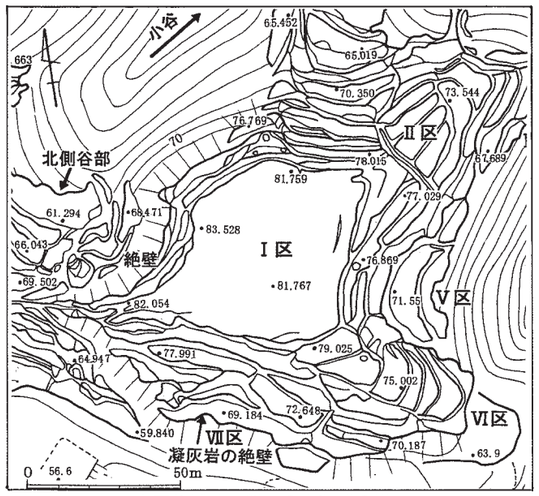
一方で、城地の小段群は、防禦施設ですから、大方、各段を結ぶ通路がありません。そのために測量で移動する時は大変です。法面も急峻に削り落されていますので、なおさらです。油断すれば、滑落しそうになります。それに、北側で日あたりの極めて悪い場所も、おかまい無しに存在します。それが畑地ですと、方角を選び、もっと広い平地が確保される筈です。農道も造られます。それは、費用対効果の面で不可欠な事です。

妥協点として、城跡の小段群は、城時代に防禦施設としての原形があって、場所により後世に農地としても利用され、規模が拡大されることもあったと考えたいのです。



山田城跡・大王谷
第Ⅰ期整地層から出土の集石2

熊本県文化財調査報告第102集
『山田城跡』1989年熊本県教育委員会



志口永城跡　斜面の小段群の様子